

浮世風呂



浮世風呂

文学博士 佐佐木信綱

文学博士 久松潜一 監修
いてふ本刊行会

文学博士 竹田 復

式亭三馬 編

浮世風呂

監修

佐佐木信綱

久松潜一

竹田復

校訂解題

市古貞次

大久保正

倉野憲司

各務虎雄

佐佐木治綱

志田延義

新間進一

野田寿雄

溝江徳明

竹下直之

昭和二十八年四月二十五日印刷・

昭和二十八年四月三十日発行・校

訂者代表竹下直之・発行者倉間勝

義印刷所常盤印刷所・発行所

東京都千代田区神田小川町二丁目

十番地「いてふ本刊行会」(電話神

田(25)二三七〇番振替東京一三五

五〇八番)

上製 価 百五十円

地方百六十円

解題

浮世風呂は式亭三馬の代表的作物である。

三馬は八丈島なる爲朝神社の神主菊池壹岐守の庶子茂兵衛といふ板木師の子として、江戸淺草田原町に生れ、日本橋茅場町の西宮新六といふ書店に丁稚奉公してゐるうち、好きな道とて、稗史小説の類を耽讀し、遂に有数の作家となつたので、その處女作「天道浮世出屋操」を著したのは、寛政六年彼が二十歳の時である。

寛政十一年には「俠太平記向鉢巻」を書肆西宮から出版した。これは前年山王の祭の際に起つた鳶の者の喧嘩を仕組んだものであるが、よ組の連中を誹謗したといふので、三馬の家と書肆とが彼等のために破壊された。これが公事沙汰になつて、暴行者は入牢、版元は科料、三馬は五十日の手鎖と、それ〴〵處刑せられた。併し此の事件によつて、三馬の名聲は俄に高まつたのである。

三馬といふ號は、唐來參和の參と、烏亭焉馬の馬とをとつて名づけたものだといはれてゐる。此の外に、本町菴、洒落齋などの號もある。

浮世風呂は、三馬が歌川國國の許で三笑亭可樂の落語を聴き、その錢湯の笑話から趣向を得たもので、寫す所の舞臺は唯町の湯屋であるが、其の湯に入りに来る老若男女の會話を、殆ど速記した如く精細に寫して、當時の俗間の風習を歷々と顯してある。町人の娘が大抵の年頃になると、武家屋敷に奉公する事だの、寺子屋通ひの子供が芝居の眞似をして遊んだり、似顔繪を蒐集して楽しんでたりする事だのも、當時が偲ばれて面白い。作者はなほ湯屋の

外を通る物賣の聲まで寫して時間の経過を示してゐる。音の寫生、これに非常に意を注いで、新しい標音法まで用ひてある。卷中の廣告文によれば、第五編以下を發刊する計畫であつたが、竟に四編九冊で終つたのは惜むべきである。

書中の標音法は原本に従つたが、あて字の讀みにくいもの、假名遣の誤れるもの等は大抵之を改めた。

浮世風呂呂大意

熟つうく監かんみるに錢湯せんとうほど捷徑ちやみちの教諭しやうなるはなし。其の故如何ゆゑにとなれば、賢愚けんご邪正じやちやう、貧福ひんふく貴賤きせん、湯あを浴あびんとて裸形はだかになるは、天地自然の道理。釋迦しやくぢやも孔子くんしも於三おさんも權助ごんすけも、産うまれた儘ままの容すがたにて、惜をしい欲ほしいも西の海。さらりと無欲の形なり。欲垢よくあかと煩惱ぼんなんと洗せんひ清きよめて淨湯じやうたうを浴あびれば、旦那様だんなさまも折助せすけも孰どれが孰どれやら一般裸體おなじはだかみ。是れ乃ち生れた時の産湯うぶゆから死んだ時の葬灌ゆぐわんにて、暮ゆふべに紅顔こうがんの醉客さいかくも朝湯あさゆに醒しやふ的どれとなるが如く、生死一重しやうしひひとへが嗚呼あゝまゝならぬ哉。されば佛嫌ほとけきらひの老人としよりも風呂へ入れば吾しらず念佛を申し、色好みの壯夫わかいうしとへも裸はだかになれば前をおさへて己おのれから恥を知り、猛き武士もうぶしの頸あたから湯をかけられても、人込ひとごみぢやと堪忍かんにんを守り、目に見えぬ鬼神おにがみを雙腕ふたうでに雕ありたる俠客ちやうばくも、御免ごめんなさいと石榴口ざうくちに屈かむは錢湯の徳ならずや。心ある人に私あれども、心なき湯に私なし。譬へば人密かに湯の中にて撒屁おならをすれば、湯はぶくぶくと鳴りて忽ち泡うかを浮うかみ出す。譬て聞く、藪やぶの中の矢二郎やじらうはしらす。湯の中の人として、湯のおもはくをも恥ぢざらめや。惣て錢湯に五常の道あり。湯を以て身を溫め、垢あかを落し、病を治ちし、草臥くたびれを休むる類たぐひ、則ち仁じんなり。桶のお明あきはござりませぬかと、他ひとの桶に手をかけず。留桶とめを我儘ごれんに使はず。又は急いそいで明あけて貸かりす類たぐひ、則ち教ぞ育いくり、田舎者いんやでござい、冷物ひやうものでござい、御免ごめんなさいといひ、或はお早い、お先へと濱つべ、或はお靜かに、お寛ゆるりなどいふ類たぐひ、則ち禮なり。糶ぬか、洗粉あびこ、輕石かるいし、絲瓜へちま

皮にて垢を落し、石子で毛を切る類、則ち智なり。熱いといへば水をうめ、ぬるいといへば湯をうめる。お互に背後を流し合ふ類、則ち信なり。かゝるめでたき錢湯なれば、此に浴する人々も、水舟の升、陸湯の桶、方圓の器に随ふ道理を悟りて、湯屋の流し板の如く、己が心を常に磨きて諸の垢をたけな。人間一生五十年、二度入の御方あるとも、御一人前の分別あるは湯屋の張札の如く、一心足らぬ萬能膏あり。馬鹿に附ける藥はあらずも、走馬の千里膏、鞭打つて呉れる交の無二膏あり。口中散を飜せば忠孝一切の妙藥。二親の安神散、兎角煩惱の火の用心は湯屋の定書に似たり。心に驕奢の風立てば家私は何時にても早仕舞なり。五倫五體は天地より預り物なれば、大切の品を御持參物なるを、色と酒とに魂の失物不存、我から招く禍は、他人の一切存不申事ならずや。名聞利欲の喧嘩口論、喜怒哀樂の高聲御無用。此の文言を守らぬ時は、仕舞湯に入り損ひ、モウ抜きましたといはれて、後悔手巾を咬むとも益なし。なべて世の中の人心は錢湯の虱に等しく、善惡に移り易き物なれば、權兵衛が褌襖から八兵衛が羽二重に移り、田婢の湯具から令室の絹布へも移る。昨日の縹緞一枚は疊の上へ脱ぎしも、今日の重着は棚の上へ脱ぐに等しく、高貴貧賤は天にあり。善惡邪正は己が招く所なり。此の意味を篤と悟らば、他の異見は朝湯の如く、己が身に染みわたるべし。唯一生の用心は、軀を借切の戸棚へ納め、魂に錠をおろして、六情を履き違へぬやうに堅く相守可申事と、神儒佛の組合行事が牡丹餅ほどの判を居ゑてしかいふ。

維時文化六年巳の春の發市にせばやと、辰の重九に毫を起して例の急案、後の觀月の芋を食つて、屁の如き小冊成る。

石町の寓居に於いて

式亭三馬戲題

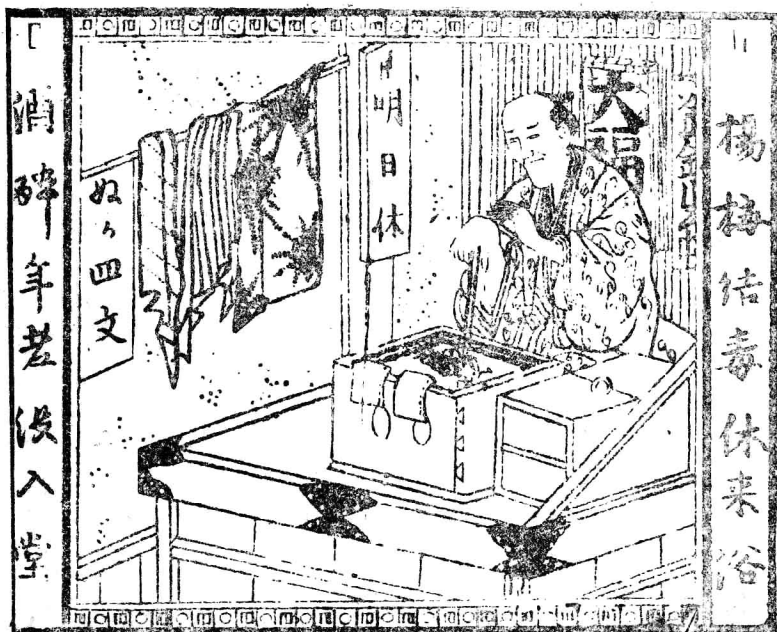




凡 例

常のにごりうちたる外に、白^{しら}濁^{にごり}をうちたるは、田舎のなまり詞にて、おまへが、わしが、などいふべきを、おまへが、わしがといへる、がぎぐげでの濁音としりたまへ。

一^{あるゆゑ}夕歌川^{ゆががわ}豊國のやどりにて、三笑亭可樂^{からく}が落語^{らくご}を聞く。例の能辯よく人情に通じて、をかしみたぐふべき物なし 惜しいかな、其趣同僅に十分が一を述べたり。傍に書肆^{ほんや}ありて吾とおなじく感笑して居たりしが、忽ち例の欲心^{よくしん}發り、此の錢湯の話にもとづき、柳巷^{りやうきやう}花街の事を省きて、俗事のをかしみを増補せよと乞ふ。則ち需に應じて前編二冊まづ男湯の部を試む。



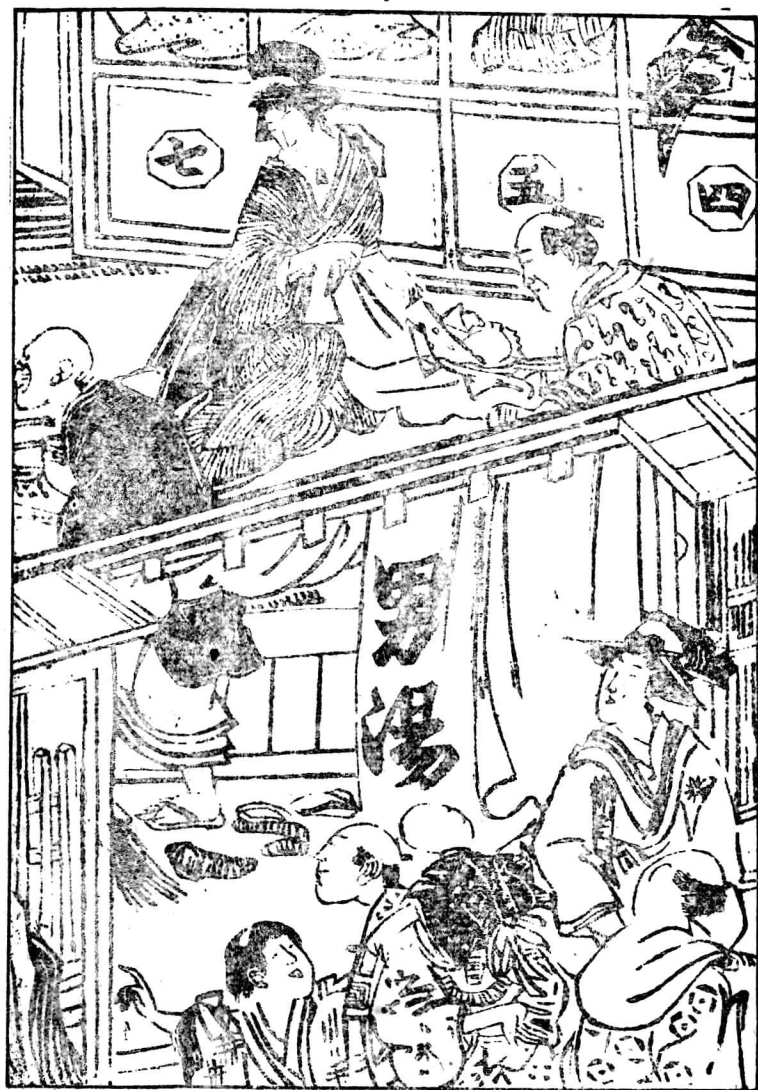
評話浮世風呂

江戸 式亭三馬戯編

前編卷之上

五日の風静なれば早仕舞の牌を出す。十日の雨穩なれば傘の樽をも出さず。月並の休日靜謐にして、賢きも愚なるも貴賤おのゝ恩澤に浴する人心、今日煤湯を沐びて五塵の垢を落し、明日貰湯に入りて六欲の皮を磨き、いつも初湯の心地せらるゝは、實にも朝湯の入加減、嗚呼結構とやいはん、噫嘻有難いかな。這首にだぶ／＼といふ僧あれば、彼首にぶう／＼をいふ俗あり。タロクととぐる男あれば、湯屋と引く女あり。薬店の小二は現金湯と洒落て讀めども、儒者の塾生反つて忍冬湯と誤るは、讀み易く解し難きの類なるべし。女湯の湯舟に簪を墮せば、湯汲の男、滑川めきて探すとも、御堂人前拾文の孔方は、青砥も惜むべからず。子供衆八文御供付十六羅漢、偏袒右肩の湯上りに浴衣容の顔世はあるとも、當時の師直更に女湯を覗かず。男湯孤ならず女湯必ず隣にあり。亭主の賓頭盧尊者は面を撫づる黢袋を貸すいとま、拍子木で留桶をきつかけ、斜に女湯を見やりて膏藥の流るゝを

知らねど、男女風呂を同じうせず、夫婦別あるを知れるや。女房の光明皇后女湯の番頭にかはる。消炭の火鉢に糠の油を採り、貸手巾の半は絞れど、却つて極老人あしき病人を入れざるは、阿闍佛の化益はあらずも、千手觀音の上這はあるべき歟。洗粉の袋はぶん／＼と匂ひて下男の鼻を穿ち、風呂の壁はとん／＼と掛きて湯波の睡を寤さしむ。或はぎやあ／＼と啼き、或はがや／＼と騒ぎ、熱いといへばぬるいと云ひ、うめるといへばうめるなと喧く。どよめきわたる風呂の中、しんめりとして枕丹前をうたへば、六法で振こむ裸體あり。ノリ地になりて角力の段を語れば、土俵入の身で出るあり。爰に衰れを留めしは、石榴口の冷物ふるひ聲にあらはれ、去程に是は又、馬ぢや／＼といふ人、思ひの外立派にあらず。ハイ出ます子供／＼は江戸節を喊る爺様にて、いつも長湯の名をあらはし、御免なさい田舎者はめりやす好の江戸子にて、ざつと一風呂手巾を濡らすのみなり。されば長湯も短湯も、あるは八百屋の縁の下と松坂音頭の白聲は、店向の新下りにて、長し短し儘ならぬ、ちよいと黄色なそり節は、サイネエモシの合の手あり。にやんまみじや佛と咬まぜれば、法蓮陀佛と吐き出すあり。ほゝほんと脚でころがし、ふゝふんと鼻へぬかすに引かへて、是は唐山かね金山の麓とは吾から名告る脚滿聲。あたまを押へて呺くあれば、尻をたゝいて語るもあり。片足あげて諷ふもあれば、踏みはだかりて怒鳴るもあり。居たり立つたりする中に、寝てゐるの口三絃は、湯舟の隅に屈み居る藝なし猿の戯れ口。神祇、釋教、戀、無常皆入り込みの浮世風呂。所はいづくと定めねど、時候は九





へゐる所

る所
磨の袋を櫛柄にて貫きしを、刷毛の間へ挟み、股引を丸めこ小脇にかいこみ、寝起きのまゝにて来る
りの男、帶と下駄ばかり、目に立つ有様、少し首を曲げて、奥歯を櫛柄で磨き
ながら來たりしが、唾を吐く拍子に、肩の手法を落す。こちらの男見て、
▲べらばい、
手拭が落ちた

●下駄の齒でぐるりとまはりながら、手拭を拾ひあげ、うしろをふりむいて、貝の口を見ながら來ると、又犬につまづく

「キヤン●畜生め、氣のきかねえ」

所にうしやアがる▲ナニてめえが氣のきかねえくせに、ざまア見や●そねむない、此野郎華美の着物を引張つたと思ツて。なんだ、まだ湯はあかねえか。朝寝な奴等だぜえ。エ、人をつけえにした。何時だと思ふ。モウ納豆賣は出直して金時を賣りに来る時分だア。ドレ手拭を見せや。紅を付けて、化粧をして、ヘン、いゝ業晒だぜえ。あれが所からあげて來やアがツて▲よせエ、癩をいふなエ。男なら持つて見や。兄が違はア●違ふ筈だア。目鼻が無けりやア山葵卸といふ面だから、火魚から揚錢を取りさうだア▲こんべらばアトいけ串焼に、どぶ板の上へつきとばすと●ア、糞だ、どツこいト飛び退、誰かモウ踏付けた跡だ。

●ア、糞だ、どツこい^{ト飛び退}誰かモウ踏付け^{ふみつけ}た跡だ。

よい、「いゝ、今、今、乃公踏だ。おめえ踏んだか、なんの踏ますともな事だ。夫がほんとうのよけい
 だぜ「よ、よ、よけでも踏たかや、仕方無ねゝなゝた。コ、コ、下駄たゝたつてたゝたゝらた▲何を
 云ふか、ねつかから分らねえ。コウおめえの病氣も困つたもんだぜ。まだ快くねえか よい「なゝ、な
 に、最能く。で、で、大丈夫だく。こゝ此通だ。夫く、の、の、此通大丈夫だア 足をも踏みしめて見
 になるをこらへて、足を踏みかたながら
 「コ、コ、此様だく、足しや大丈夫だ。此間も本所の、伯母さん、伯母さんの方
 に火火火事だツた、かけてツたア、倒たアく、思もたま倒たア。伯母たん譽めた、伯母たん譽めた